

移植機導入によるきく栽培の省力化

【平成 28 年 7 月 20 日掲載】

世羅町のイノチオフローラ（株）（石黒信夫（いしぐろのぶお）代表取締役社長）では、今年から移植機を新たに導入し、露地栽培でのきく定植作業の省力化による労務の効率化に取り組んでいます。昨年の世羅郡きく生産連絡協議会（眞野徳己（しんのなるみ）代表，会員 9 名）主催の研修会で、きくの省力機械化体系を東部農業技術指導所が紹介したことを契機に、同社では導入を検討してきました。

この移植機は、井関農機（株）が葉菜類用移植機（ナウエルナナ PVHR2-120EL2G）を「きく」用に改良したものです。4月上旬から定植を開始し、6月上旬までの約 10 日間で計 1.2ha の植付けを完了しました。移植機の導入により作業時間は従来の約 40%まで削減できました。このため、余剰労力はスプレーギクなどの他品目の収穫出荷や育苗管理作業などに振り分けることができ、効率的な労務管理につながることを期待されます。

また、欠株などもほとんどみられず、定植精度に実用上の問題はありませんでした。きくの定植作業は、これまで中腰姿勢のため重労働でしたが、移植機を用いることによって、立ち姿勢で行えるため負担が大幅に軽減され、従業員からは非常に好評でした。

農作業の軽労化は、担い手確保や規模拡大を目指す上で大きな課題となっています。東部農業技術指導所では、それぞれの生産者の経営発展に合わせた省力機械の導入を進め、産地拡大を推進します。



【きく移植機】



【定植後の良好な生育】